



解説 浮世博士 1962年生まれ。塾講師、大阪の私立天王寺中学・高校をへて2015年から奈良の私立西大和学園中学・高校の社会科教師。『もう一つの日本史(幻戯書房)』、『宗教で読み解く日本史(すばる舎)』など、著書多数。



イラスト・武藤文昭

「士農工商は身分序列ではない」というのが、この図の主旨です。実際には幕府の命令として出されたものではないことが明らかになり、教科書の本文から記述がなくなりました。いまは、1641年から数年にわたった「寛永のききん」のあとに出された法令が記されている例がめだちます。

田畑の売買について禁止することを定めた法令についても、そのねらいなどが見直され、ききんによって荒れ果てた農村を復興させるために幕府が出したという側面が強調されています。幕府が一方的に農民から搾取していた、という考え方は正しいといえます。

かれこれ20年ぐらい前まで、教科書の江戸時代の単元には身分制度として「士農工商」についての説明がありました。

士は「武士」、農は「農民(百姓)」、工は「職人」、商は「商人」といった感じでしょうか。この順に身分が高いとされ、厳しい税を取り立てられていた農民については「不平や不満をそらす意味もあって、農民の身分を上から2番目にすえ、武士の次に高い」などと説明される場合もあつたようです。

しかし、士農工商は当時の世の中を構成する人たちのことをあらわす言葉で、階級や序列に分けるものではないと、最近の教科書でも身分の序列として士農工商を説明することはなくなりました。

士農工商は身分序列ではない

ただし、江戸時代に身分そのものや序列がなくなったわけではなく、「武士」と「武士以外」とのあいだには明確な差がありました。

「百姓」という言葉にも注意が必要です。農民をあらわすと限定しますが「百」の「姓」ですから「いろいろのな」とか「多くのな」といった意味合いがあるはず……。実は農民だけでなく、漁業や林業などを営む人たちをまとめて「百姓」と呼んでいたのです。

江戸時代の前から、村にはいろいろな産業が発達し、さまざまなライフスタイルがありました。それにもかかわらず「百姓＝農民」と規定すると、日本という国の成り立ちを考えると、日本という国の成り立ちを考へるとき、農民や農村だけからとらえることになりかねません。その結

果、多様なライフスタイルが存在していたはずなのに「閉鎖的だったんだ」などと誤った印象を助長する心配があります。

安土桃山時代に全国を統一した豊臣秀吉についても、安易に貧しい農民の出身と理解するのは避けられます。行商人のような生活をしてきた時期があり、商才や経済に対する先進性に注目すると、子どものころに経済活動と接点をもった実体験が、のちの秀吉を育てたと考えるほうがつつまが合いそうです。

「農村搾取」の見方も変化

ところで江戸時代の農民たちは幕府から重税などを課され、過酷な支配を受けていたのでしょうか。

教科書にはかつて「慶安の御触書」という法令が載っていました。江戸時代前期に農民の生活について細かく指示をあたえ、厳しい支配の例とされていました。

実際には幕府の命令として出されたものではないことが明らかになり、教科書の本文から記述がなくなりました。いまは、1641年から数年にわたった「寛永のききん」のあとに出された法令が記されている例がめだちます。



科学史

新型コロナウイルスの論文捏造

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に対し、医学や分子生物学などの研究が総力を挙げて進められています。ワクチンが短時間で開発されたのも、成果の一つです。しかし、大勢の研究者によって多くの論文が発表されると、なかにはお粗末なもの、まちがっているもの、そして研究結果が捏造されたものも混ざってくるのです。

10万人の治療データを収集？

2020年4月から5月にかけて、学術雑誌やインターネット上の学術論文投稿サイトに、3本の論文が発表されました。アメリカの企業サージスフィアのサパン・S・デサイ博士(1979～)をふくむ研究グループが、多数の患者を対象にどんな治療法がCOVID-19に効き、どれが効かないかを調べたものでした。それによると「ヒドロキシクロロキン」というマラリア治療薬をCOVID-19の治療に用いることは効かないばかりか、かえって有害だといわれています。あわて

た世界保健機関(WHO)はヒドロキシクロロキンをを用いる試験的治療を一時、中止しました。

別の論文では、寄生虫治療薬「イベルメクチン」に治療効果があると述べています。ペルーなどではイベルメクチンがCOVID-19に効くといううわさが広まり、人々がこの薬を求めて薬局に押しかける騒ぎになりました(デサイ博士らの発表だけが騒動の原因とはいえません)。

デサイ博士らの研究は、世界のさまざまな医療機関でのCOVID-19患者の治療データを集めたもので、その数は最大で約10万人分としていました。しかし、2020年4月といえばCOVID-19の世界的流行(パンデミック)が始まってまもない時期。WHOがパンデミックを宣言してから1カ月ほどしかたっていない。そんな短期間に、どのようにして膨大な治療データを集めたのでしょうか。

世界中の医療機関の医師がてんでんばらばらに記録した治療結果をコンピューターに入力する作業は大変



イラスト・タネノカズヒロ

な手間がかかるはず。そのような個人情報を研究に用いるには一人ひとりの患者の同意も必要です。

データを見たり、あつかったりできたのはデサイ博士だけで、共同研究者たちもデータに触れたことはありませんでした。不信(不審)と疑惑の声が上がり、共同研究者たちはデサイ博士にデータを見せるように求めました。ところがデサイ博士はそれを拒否しました。共同研究者たちは「これはおかしい」と気がつき、論文を撤回しました。患者にかんするデータはでっち上げだったのです。

科学の捏造は必ずばれる

データをでっち上げたり、ありもしない発見を報告したりする捏造論

文は、ときおりあらわれます。科学の歴史には世界を驚かせる大発見が捏造だったと判明する事件が無数に残されています。捏造論文や捏造研究は自然の法則に反するため、別の研究者が同じ実験をしても同じ結果になりません。遅かれ早かれ、うそはばれます。

こうした自浄作用、免疫機構を科学は本質的にもっています。科学が信頼できるゆえんです。

解説 小谷太郎 博士(理学)。1967年生まれ。青山学院大学、立教大学などで非常勤講師。新刊に、本記をふくむ捏造事件を集めた『なぜ科学者は平気でウソをつくのか』(フォレスト出版)